

# 笑いと回復のための語り

——ゾラ・ニール・ハーストンの『騾馬と人間』を読む——

ウェルズ恵子

黒人は身銭を切っても笑いたい。・・・黒人の世界は笑いに溶ける。  
The Negro is determined to laugh even if he has to laugh at his  
own expense. ... His world is dissolved in laughter.

Zora Neale Hurston, "Folklore and Music"

## 1. 黒人口頭文学へのアプローチ

口頭の言語表現を含む大きな意味での文学においては、苦境を説明できない立場の者が何かを表現することによって、聴衆や読者の感動を生むことがままある。あるいは、何らかの禁忌抑制のため説明できない種類の事柄が直截な表現を迂回して言語化されたために、むしろ表現が豊かになることがある。そうした語りはしばしば伝統的な様式を仮面として、仮面の下に論理の飛躍やズレを隠している。また、集団で共有される神話や民話や歌謡や詩は、個人的経験の語りとは異なる枠組みをもち、やはり同様に現実世界からの飛躍やズレを語りの核とすることが多い。

論理的に説明するという意味での「語り」は、人間とことばの関わりにおいてはごくマイナーな部分であって、むしろ他者への働きかけ全体を本来的な「語り」ととらえるべきなのではないかと私は考える。後者の意味における語りでは、沈黙も笑いも、あてこすりも目配せも、ことばと並んで語りの重要な構成要素であり、語りの流れから逸脱した付加要素なのではない。ところで、文化人類学者で小説家でもあったゾラ・ニール・ハーストンは、アフリカ系アメリカ人を「金を払ってでも笑いたい」人々なのだと書いている。("Folklore and Music," *Library of America*, 892) ハーストンの収集した黒人民話をまとめた作品、『騾馬と人間』*Mules and Men* (1935) は、民話がさそう笑いを作中の黒人聴衆と読者とが共有できるように演劇的な設定が施され、語り手と聴衆に共通する笑いがあってはじめて、語られた民話の意味が成り立つことを主張している。

アフリカ系アメリカ人の口頭文学は、ローレンス・W・レヴィンやヘンリー・ルイス・ゲイツを筆頭にアフリカ系アメリカ人研究の研究者たちが注目してきている、黒人文化の要である。それでも黒人口頭文学に関する研究は、資料収集の困難さも手伝って、多様に発展してきたとは言いがたい。批評と分析は、アメリカ合衆国における差別構造への切り込みとアフリカの伝統との比較が中心で、社会学的な見方に重点を置く方法が手放せない。社会批判的に黒人文化を解釈する流れは、ヒップ・ホップの歌詞など現在進行形の口頭文学の創作傾向に少なからず影響を及ぼしてしていると思われる。これについては、稿を改めて論じたい。

また、1920年代から続いている黒人民話のアンソロジー編纂は、黒人の英語をどの程度保存するかに主な関心がはらわれ、物語だけを抜き出す従来の方式そのものについては、ほとんど疑問が呈されずにきた。ところがハーストンは、1920年代に黒人口頭文学の重要性が認識される出発点の段階で、笑いが生む活力に黒人のアイデンティティを見出し、語りの場を含めた生活劇場的な娯楽として彼らの民話を記録しようとしたのである。白人との対立構造で抽出される黒人性ではなく、笑いを愛するという人間本来の特質からアメリカ黒人の生のあり方を把握し、作品中に記録、再現しようと試みたのだ。これは黒人口頭文学へのアプローチ全体からみて独自の姿勢であり、かつ黒人文学の魅力そのものを主張するという、優れて時代に先駆けた視点に支えられていた。

ハーストン自身が聞き取り収集した黒人民話のユニークなアンソロジー『驃馬と人間』は、民謡収集者のゾラ（ハーストン）が故郷のフロリダ州イトンヴィルを訪れ、友人たちの協力を得ながら人々と関わり、高等教育を受けた者への嫉妬や盛り場でありがちな男女の絡みを経験しつつ、物語を記録していくという設定である。この作品は、文化人類学者フランツ・ボアズの指導を受けたハーストンが、1927年から31年までシャーロット・メイソンという白人パトロンから経済的援助を受けて、フロリダとニューオーリンズで採話した経験や資料をもとに執筆された。作品では、面白い話をしようと申し出た人が語る時は黒人たちがあたりでざわめき、話が終われば大声で笑ったり野次を飛ばしたりする。座敷寄席的なざわざわした騒音が作品を覆っている。記録された話はどれも笑いを誘い、日本で育った私が読んでも思わず噴き出す個所がたくさんある。ハーストンが民話収集を行った1920年代後半は、南部の黒人にとって差別と貧困が厳しい時代であったのだが、『驃馬と人間』を読む限りでは、彼らは生き生きと笑い、生き生きと喧嘩をし、混乱した現実に見出しながら生活しているように映る。そこで本論では、ハーストンの黒人理解を紐解きながら、笑いと生きるためのエネルギーの回復について考えてみたい。

## 2. 民話の登場人物たち

黒人の民話では、日常の秩序を混乱させるトリックスターが同時にヒーローである。黒人民話にはトリックスター以外のヒーローがおらず、ヨーロッパの叙事詩にあるような一面的価値観における成功神話がないのである。したがって、黒人のヒーローはみな二つの対立的な世界に属している。彼は強者の価値観と利益に迎合するよう行動するかに見えて、実は別の行動基準でふるまう。嬉々として相手をだまし盗みや暴力も躊躇せずに行うので、通常の世界規範からみると悪者である。しかし社会的弱者の聴衆にとっては、強者への暴力は正義の暴力と映るのであるから、彼はヒーローなのだ。物語の中で彼らは、強者の世界と自分の世界を自在に行き来し、強者のエゴに取り入ってはこれを毘にかけ、もっとも侮辱的な方法で痛めつけるのである。

アフリカの伝統を背景にした動物民話の中で、トリックスターの代表格は兎 Brer Rabbit (=Brother Rabbit) である。熊や象といった自分より大きく破壊力のある動物を狡知によって陥れ、おごる強者に復讐したいという自らの欲望を全うする。ジョン John またはジャック Jack

と呼ばれる男性主人公は人間のトリックスターで、知恵と姦計を用いて彼の奴隷主 Ole Massa (= Old Master) を翻弄しては、奴隷であることの緊張を緩和しながら自由への欲望を解放する。黒人民話の悪魔 Devil は脇役的なトリックスターで、ジョンの欲望の成就を導く役割を果たす。奴隷のジョンは当然ながら自由を切望しており、その望みは既成社会の秩序に真っ向から対立するので、彼を助けるには善と悪とを逆転させなければならない。悪魔はこの価値観の転覆にきっかけを作るのである。そのときに、悪魔の対立項には神様 God がいる。悪魔が生き生きしている分だけ神様は存在感が薄く頼りにならない。こうした登場人物が別々の話の中で基本的に共通する性格や感性を發揮させながら、活躍するのである。個々の話に時間的な前後関係をもつ横並びのつながりはないが、プロットを動かす登場人物たちは、各自の性質によって話を縦方向に結びながら、過去のものとも現在のものとも決めかねる黒人民話固有の宇宙を構成している。そこで以下に、兎、ジョン（ジャック）、主人、神、悪魔らがどのような笑いを聴衆にもたらし、エネルギーに満ちた民話の宇宙を作っているかを述べたい。

### 3. 自由へのあこがれ——兎の物語

兎 Brer Rabbit は、ジョエル・チャンドラー・ハリスによる『アンクル・リーマス物語』（1880年）*Uncle Remus: His Songs and Sayings* の出版以来、一般的にもっともよく知られた黒人民話の登場人物である。ハリスはブラァ・ラビット話に集中して黒人民話を編纂した。一方『驟馬と人間』はブラァ・ラビット話に大きな比重を置いておらず、一連の動物民話の一つとして位置付けている。そこには、ハリスに対するハーストンの抗議の姿勢が読みとれる。ハーストンや民話の提供者たちにとって、ブラァ・ラビット話にならんで優れた民話系列は複数あるのだ。とはいえ、第7章第1話「犬が美声を失ったいきさつ」（“How Brer Dog Lost His Beautiful Voice”: 117-18）は、兎が面目躍如たるトリックスターぶりを示していて痛快だ。テーマは、なぜ犬は怒り狂って兎を追いまわすのか、である。

昔、犬も兎も同じ娘に恋をしていた。ミス・サフローニという、フランス風に気取った名前の娘だった。犬がバンジョーを弾いて歌をうたうので、ミス・サフローニは兎には目もくれず犬ばかりちやほやする。これに嫉妬した兎は、お世辞を言って次のようにもちかける。

「おいドッグ、いい声してんねえ、おまえ。歌がうまいよ。俺もそんなふうにならば、ミス・フローもちょっとは俺を振り向いてくれんのにさ」

「いやあ、ラビット、たいしたことないって。俺はちょっとは唸れるけどさ、彼女に満足してもらえるくらい、うまく歌えたらいいんだけど」

「それだよ、俺が言おうとしてんのは、俺、声をよくする方法を知ってんだぜ」

「えっ？ ラビット、えっ?! どうやって?」

「知ってんだってば」

「ちえ、はやく教えろよ。待たせんなよ、早くって」

「まず<sup>のど</sup>咽喉の奥を見ないとね。見せてもらってから、もっとよく歌えるにはどうしたらいいか教えてやるよ」（118）

そこで犬は大きな口をあんぐりと開け、目を閉じて、兎に咽喉の奥を見せる。兎はやにわに剃刀を取り出し、犬の舌をざっくりと切ってしまうのである。この後、がなり声しか出なくなった犬は、世代を越えて怒り狂い兎を追いかけ続けることになるのだ。

この話のおかしさは、気のある娘にちやほやされて舞い上がっている犬が、下心を抱いた兎にまんまと乗せられるところである。物語フレームとしては、犬が兎を追いかける理由を説明した起源説話だが、聴衆は、剃刀で舌を切るという目の覚めるようにシャープな兎の暴力行為に衝撃を受け、清々として笑う。兎が犬に与えた身体的ダメージは回復の見込みがなく、さっぱり女にもてない兎の劣等度と釣り合うものであるから、兎は追いかけられつつも「ざまあみろ」と思い続けることができるのだ。兎は、暴力によって犬との力関係を曖昧にした。抑圧された立場の兎に同族的な親近感をもつ聴衆は、力関係の縛りがほどけた瞬間、解放されて笑うのである。

さて、この話には後日談がある(“What the Rabbit Learned”: 118-19)。犬族に追われて逃げ回るのがほとんど嫌になった兎族は、犬に和解を申し入れた。これを受けて犬族は会議を開き、投票を行った結果、兎を追うのは止めようということになった。和解のしるしに、犬は兎を自宅での夕食に招いた。兎は犬について行くが、他の犬の吠え声が耳につき怖くて仕方がない。「会議で決めたんだから大丈夫だ」と犬は兎を安心させようとするが、兎は信用せず「みんなが会議にいたわけじゃない」と、全速力で逃げ帰ってしまう。その時、兎は次のように言い残す。

俺たちはたいして学校にも行ってなくて知ってる文字は三つだけだけど、ヘマは踏まねえ。藪が揺れたら走って逃げるのさ。(119)

会議で事を決めるのは権力者の方法である。彼らは自らに都合のよいルールに従って判断を下し、それを正当化して弱者に押し付けてくる。日常の力関係では犬に到底かなわない兎が、犬のルールを信用しないのは当然であろう。もともと、自宅に招かれて夕食を共にするなどという偽善的な和解の儀式を、兎は求めていなかった。ただ「放っておいて」(leave off) もらいたかっただけである。価値観やルールが異なる犬とは同じ土俵に立たないというのが、弱者たる兎の知恵である。兎は、話の前段で犬の舌を切り犬に追われる身となるが、後段ではぎりぎりまで犬の世界に近づき、危険の一手手前で自分の場所に駆け戻っていく。あやうい橋を渡りながら回復不可能なヘマは踏まない兎の自由さこそ、聴衆にとっての笑いと解放感の源泉なのである。

ところで私はこの民話の翻訳にあたり、犬と兎を従来のように「犬どん」「兎どん」としなかった。理由は二つある。ひとつは、「犬どん」「兎どん」に代表されるような昔話風のアプローチは、黒人民話に関しては誤りだと考えるから。もうひとつは、犬も兎も直接人間と交換可能な登場人物だからである。これら二点は、つまるところ、ハーストンの収集した黒人民話それぞれを語る人や聞く人々にとって昔の話ではなく、自分たち自身の話だということに集約される。そうでなければ兎が剃刀を使うという同時代的な展開が説明できないし、暴力行為をもって屈辱から回復する「兎」が現代の大衆文化でヒーロー的なイメージキャラクターになっていることも理解できない。現代に「ドッグ」や「ラビット」が生きている具体例をあげれば、スヌープ・ドッグという名のヒップ・ホップスターがいるし、ラビットはヒップ・ホップの人気テーマで、マ

スコットイメージも作られ、曲やアルバムのタイトルにも使われている。黒人民話の動物たちが現代の若者文化にインパクトを与え、自己像のモデルを提供しているのである。

#### 4. 緊張と解放——ジョンの物語

ハーストンがもっとも重要視しているトリックスターは、奴隷の「ジョン」または「ジャック」である。ハーストンによれば、彼は「もっとも偉大なる南部の文化的ヒーロー」で、「悪魔だつて打ち負かし、神様より頭がいい」（“Characteristics of Negro Expression” from *Negro: An Anthology*. American Library, 836）。彼の主人は「たまには頭がいいが、だいたい馬鹿」であり、ジョンはそれを見越して行動する。一連のジョン（ジャック）物語は、主人、神様、悪魔という三種類の権威者に対し、ジョンが自分の価値観でどう対応し利益をせしめるかを描いている。ジョンが権威者と対峙する時に物語はクライマックスを迎え、権威側の秩序を逸脱したジョンの言動によって人物間の力関係が転覆し緊張が解放されると、聴衆は滑稽さを感じて笑い、物語ではジョンの利益が生じる仕組みになっている。ジョンが場面の転換を図るときの武器は、嘘、ペテン、暴力、祝祭的混乱などである。そして笑われるのは、常識的な行動規範を学習していない「子どものような」ジョンのようでありながら、実は、変幻無得なジョンとは対照的に融通が利かず不器用な権威者である。

権威者の中でももっとも頻繁に笑い物になるのは、当然のことながら、ジョンの主人である。ジョンは主人のお気に入り、格別の信頼を得ている。奴隷が主人を慕っているわけではないから、主人の信頼を得ているということ自体、ジョンがいかにごまかしにたけているかを暗に語っているのだが、主人はとんとそれに思い至らない。物語の中で、多くの場合主人はままとジョンに騙され、気の毒とも思える扱いを受けることもある。たとえば次の話では、主人は財産と名誉を失った挙句に殺されてしまう（“Ah’ll Beatcher Makin’ Money”: 45-9）。

主人公ジョンは、主人に気に入られて馬を一頭譲ってもらった。するとジョンは自分のものになった馬は決して鞭打たず、主人のいないところで主人の馬だけを鞭打ったので、これを目にしたある白人が主人に告げ口をした。それで主人は、「私の馬をまた鞭打ったら、お前の馬を取り上げて殺してしまうぞ」とジョンを脅かした。するとジョンは、「ご主人さま、俺の馬を殺したら俺は金持ちになります」と言う。それからジョンは再び主人の馬を鞭打ち、罰に自分の馬を殺されてしまう。だが彼は殺された馬の皮を剥ぎ、棒にひっかけ肩に担いで街へ出て行った。

ジョンは占い師だったが、だれも知らなかったのさ。ある男に会って、こう聞かれた。

「ジョン、肩に担いでいるのはなんだね？」

「こいつは占いができるんです、旦那」

「ほう、じゃあやらせてみる。巾着一杯の金と鞍をつけた馬一頭、それから牛を五頭おまえにやろうじゃないか」

ジョンは馬の皮を地面に下ろして棒を抜き、それで皮をたたいてから耳を近づけて聞くふりをした。

「旦那さんの寝室のベッドの後ろで、奥さんに話しかけている男がいます」（46）



妻が浮気していると言われた男は飛んで帰り、現場を捉える事が出来た。ジョンを信用したこの白人はさらに褒美を積んで占いを頼み、結果に再び満足して約束通り払ったので、ジョンはますます金持ちになった。ジョンの成功を知った主人は自分も儲けたくなり、自分の馬を殺し皮を剥いで「馬の皮を買わなかね！ 馬の皮を買わなかね！」と街を行商するが、5,000ドルというとんでもない高値を聞いた通行人たちの笑い物になっただけだった。馬の皮を使って占いをした、という肝心なところをジョンから聞かされていなかったのである。

金持ちになったジョンはもう働く必要もなかったが、主人の馬車を扱うのが面白かったから相変わらず彼に仕えていた。そして、主人の目を盗んでは馬車に自分の祖母をのせてやっていた。それを聞いた主人は、再びそんなことをしたらおばあさんを殺してやると言い、この脅かしをジョンは無視したので、おばあさんは喉を切られて殺されてしまう。するとジョンは、おばあさんをこっそり埋葬してから、先に使った馬の皮をかついで街へ行く。「占いはいらなかね！ 占いはいらなかね！」と言いながら歩いているとまた客がついて、同じようにうまくいってジョンはさらに金持ちになった。これを知った主人は、なんと自ら自分の祖母を殺し「おばあちゃんはいらんかね！ おばあちゃんはいらんかね！」と街で死体を売ろうとして、気が狂ったと思われるのである。

自分をだましたジョンにすっかり腹を立てた主人は、彼を川に沈めようと袋に詰めるが、重りを忘れて家に取りに帰る。その際にジョンは蛙を1ドルで買取して助けてもらい、自分の代わりに亀と煉瓦を袋に詰めておく。そしてその場を離れると街へ行き、再び馬の皮の占いをし白人の家に入った泥棒を言い当ててやり、手に入れた新しい馬で主人の家に帰った。「私を川に投げたら金持ちになるって言ったでしょうが」とジョンが言うので、主人は自分を川に投げ込んでくれとジョンに頼むのである。ジョンはもちろん重りを忘れず持っていき、主人を袋に詰めて川に沈めてしまったという話である。

ジョンあるいはジャックを主人公とする一連の物語で注目したいのは、主人に対するジョンの徹底的な不信感と主人の価値観からの独立である。引用した物語の最初で、ジョンの働きを愛でて主人が馬をくれても、それを恩に思って主人の利益を図るようなことをジョンは一切しない。反対に、陰に隠れて主人の馬をいたぶり、主人をだまし、財産や評判を傷つけた挙句の果てに殺してしまう。ここには、どのように足し引きしても主人の行為は死に相当するのだというメッセージと、ジョンの憎悪が見抜けない主人に対する軽蔑が表現されている。主人は、ジョンの馬、祖母、未遂ではあったが彼の命、というかけがえのない三つのものを、いとも簡単に抹殺したのである。その報復にジョンが同じことをしたっていいじゃないかと話し手は思っている。お互いを平等にとらえた見方に思い至りもしない主人の単純さが笑い物にされているのである。

またジョンは、物語の最初に自分の馬を殺されたとき深く主人を恨んだに違いないが、その場で仕返しに主人を傷つけて自滅するような軽はずみなことはしなかった。自分の財産を獲得し、主人は狂ったと世間に思わせ、自由への確実な道を用意してから、主人の命令に従って主人を殺すのだ。この過程でも、ジョンは主人に逆らったり怒ったりせず完全に自分をコントロールしている。どこに取り入り何を隠せば主人を翻弄できるかを熟知しているのだ。ジョンの一見行き当たりばったりな占いが当たったのも、裏の世界の出来事に彼が精通しているためであ

る。

搾取され極限に追い込まれた人が、いかに強者に取り込み自己の生存をはかろうとするかについては、石原吉郎の著作やヴィクトール・E・フランクルの『夜と霧』に言及するまでもなくいくつかの記録があるが、それらは、憎悪する者に媚びへつらうことを受け入れがたい人間の本性としてとらえ、二度と経験したくない悪夢として書いている。ところがジョンの話では、ジョンの裏表ある行動も嘘もペテンも暴力も、みな笑いの素材なのである。なぜならジョン物語の聴衆にとって、自分たちを人間とするなら主人は人間ではなく何か別の、虫けらのようなものなのだ。普段主人は、自分たちに対し虫けらを扱うように接するのだから、ジョンが主人を虫けら同様とみなすのはネガとポジが反転しただけのことである。一点の曇りもないこの価値観の転覆が、ジョン物語の笑いの源泉で黒人聴衆に元気を回復させるトリックである。

ジョンが黒人民話のヒーローになりうるのは、彼が巧みに仮面を使い分けるからである。ジョンは主人に対するときは仮面をかぶり、特別に気に入られて油断させ、隙を見て盗みをしたり怠けたりできる、小さな自由を手に行っている。これは、より大きな自由へ解放されるための切符である。引用した話の前段でのおかしさは、仮面の世界（白人の秩序の世界）と仮面の下の世界（ジョンの秩序の世界）の両方が聴衆には見えるからこそ生じている。先も述べたように、ジョンは社会の裏側の動きをよく知っている。それで、妻の浮気や盗みの予知が可能なのだ。主人は自らの価値観やシステムのほころびには無反省で、状況が意外な展開を見せ自分に不利に動き出しても行動様式を変えない。ジョンはその隙をついて、仮面の世界と仮面の下の世界とを往來しつつ、主人を翻弄するのである。主人がおばさんの死体を売り歩く姿や、欲に目がくらんで川へ沈められるというグロテスクな場面がもつアクの強い滑稽さは、かわいがっていた馬を殺されてもその皮をはいで復讐の武器とし、大事にしていた祖母を殺されても何もなかったかのように復讐を続けるジョンの伶俐さと表裏になっている。

黒人が運命的に二つの世界にかかわっているということを、W.E.B. デュボイスは「二重意識」double-consciousness と書いた。

このアメリカ世界は、黒人に真の自己意識を持たせず、黒人はもう一つの世界が見出したことを通してのみ自分を見るようになっていく。いつも、他人の目で自分を見つめている感覚。軽蔑と憐憫を楽しみながら眺める他人の世界の物差しで、自分の魂を測るということ。こうした二重の自己意識は、比類なく衝撃的感覚である。(DeBois: "The Forethought of Our Spiritual Strivings": 10-11)

デュボイスは、白人の価値観によって自己を省みざるをえない黒人が、白人の世界と自分のいる世界との亀裂にはまってしまう異様な感覚を述べている。二重意識の苦悩は、20世紀を通してアフリカ系アメリカ人文学のもっとも重要なテーマとなってきた。

しかし民話の世界では、ためらいもなく二つの世界を出入りして自己の生存を勝ち取るジョンのような人物はヒーローである。異質な世界の境界を行き来する彼の柔軟性や、予想される筋書きをまんまと書き変えてしまう自由さは、二重のアイデンティティという弱者のジレンマをむしろ優位な特質へと転換してしまう。聴衆は、最初は主人に圧迫されてじたばたするジョ

ンを笑うが、話の最後では弱者になり下がった主人を心から嘲笑し、主人とその権力の消滅を見てエネルギーを回復するのである。もちろんここで、自己の二重性を重荷としないヒーローが、同時にトリックスターという滑稽な役回りを演じている点に、アメリカ黒人の根源的な苦悩を読むことはできる。しかし民話の世界に遊び語りの時間を共有している人々は、苦悩よりも笑いを選び、現実のシステム変革よりも想像の中で見事に力の転覆が起こる物語から、明日を生き抜く気力を得ようとしているのである。

## 5. 曖昧な権威者——神様の物語

黒人民話において、キリスト教の神様<sup>ゴッド</sup> God はとても頼りない。民話では神様 God と主<sup>ロード</sup> Lord が使い分けられており、神様は一登場人物であり笑われることもあるが、主は人格をもたない祈りの対象あるいは祈りの言葉としてのみある。いまここで問題にする黒人民話の神、ゴッドは、イスラエルの神のように怒ることもなければ、イエスのように奇跡を起こすこともない。ジョンの主人ほど間抜けでもないが完璧とは言い難く、善良なだけで危機に際してはほとんど救いにならない。黒人の魂を積極的に天国へ招き入れることもない。それでも黒人の想像世界に神がいるのはなぜなのか。

まず、地上の生活を舞台にした話では、神は黒人の求めに答えず薄い煙のように存在感がない。たとえば、次の話はどうだろう。奴隷時代のこと、ある男が柿の木の下で「白人をみんな殺してください」といつも神様に祈っていた（“Kill the White Folks”: 96）。これを耳にした白人の主人は柿の木の上で待ち伏せして、彼の祈りが始まると木の中から大きな石を男の頭に投げつけた。男は気を失って倒れたが、目を覚ました時「神様、白人と黒人の区別もできないんですか!」と叫ぶ。この話では、神は不在で白人の主人が代わりを演じている。男は、主人にやられたと気づいていただろうけれども、主人に文句は言えないから無知を装い、神に文句を言ってすませているのである。全知全能であるはずの神が黒人と白人の区別もつかないという指摘もおかしいし、白人を皆殺しにしてくれという極端な願いの感情的リアリティと、現実には甘くないという実際のリアリティの間にあるズレも笑いを誘う。この話に救う神はいないのだが、少なくとも白人への憎しみや不合理への抗議を口にする相手としては、神は機能している。その意味で、神は利害を共有しない語り手と白人との仲介者である。両者に充実したコミュニケーションは成り立ちえないのだから、仲介者としての神の存在感が希薄なのは当然である。

世界の起源を語る創造民話には、なぜ黒人は黒いのかを説明しようとする話が複数ある。ハーストーンが収録した「なぜ黒人は黒くなったか」という話では、黒人が神の秩序に応じた動きをしないので、それに苛立った神がついへまをしたのだとされている（“Why Negroes Are Black”: 32-3）。神は世界を作った後のある日、人々に身体の細部を一つずつ与えた。まずは目、次は歯というように。皮膚の色を与えるべく作業を進めているとき、三時間半待っても現れない人間たちがいた。なぜ三時間半なのかはわからないが、厳密に時間を指摘しているところに秩序のあるじたる神の性格と、秩序を重んじる人にありがちな堅苦しさが読めておかしい。そういう人が我慢できる限界は、三時間半くらいだと語り手は踏んでいたのだろう。それはともかく、ぎりぎりまで待って早く仕事を終わりにしたかった神は、天使のラファエルに命じてまだ来て



いない人々を迎えに行かせた。ようやく到着した者たちは押し合いへしあいして大混乱になったので、神は思わず「さがれ、ゲット・バック、ゲット・バック」と叫んだという。ゲット・バックはゲット・ブラック（黒くなれ）に発音が似ていて、それで遅刻者たちが黒人になったという説明である。ここでも、表面的には、時間にルーズで言いつけどおりに整理できない黒人のいい加減さが笑われているのだが、同時に、几帳面すぎて自分のペースで人を動かそうとし、思い通りに行かないとイライラして失敗してしまう、妙に人間的な神様が笑いの対象になっている。加えて、いつも人に指図されている黒人たちは、命令者の言いつけに時間厳守で従うことには価値を見出さないのだから、遅刻程度のことで永遠に続くと思われる重い差別を負わされた恨みも表現されているのである。

黒人民話の神は善良だが融通がきかず、自分のすることの影響をよく考えないで力行使するために、しばしば迷惑な結果を生じさせてしまう。神が男女を作った時の話はそれを具体的に示している（“Why Women Always Take Advantage of Men”: 33-8）。はじめ、女と男は同じくらい強かった。だから二人の争いに終わりがなく（女と男は争うものという前提がまず笑えるのだが）、うんざりした男は天国に行って神様に頼み、自分の方を強くしてもらった。その結果、男が威張り散らして妻を殴り彼女はどうしても勝てないので神様に抗議しに行くと、一度与えたものは撤回できない、女を強くしても男はもっと強くなると断られる。女は腹を立てて、こんどは悪魔に相談に行った。すると悪魔は、神様のところから鍵束をあずかって来いという。女が言われたとおりにすると、悪魔は鍵束から三本の鍵を女に与えた。それらは寝室と台所と子ども部屋の鍵で、男は女と折り合いをつけてそれらの部屋へ入れてもらわなければ、息がとれないし食事もできないし、子どもを作ることもできなくなってしまった。そういうわけで、男は力仕事に苦しみ女が男をコントロールするようになったという。神様が起こした混乱の後始末を悪魔がしているのである。

こうして見てみると神の権威はとても曖昧で、判断力も完璧ではない。というのも、黒人にとって神は不合理な運命を自分たちに与えた張本人であり、しかし一方では自分たちを救ってくれるはずの存在だからだ。全知全能の神や永遠の楽園としての天国は黒人民話には現れず、神は話の要点が見抜けない少し気が抜けた老人で、天国は、つい自分の安全を第一に気遣ってしまう小心な天使たちが神の小間使いをしている場所である。白人と価値観を一致させもする神を黒人が自分たちの世界に否定しなかったのは、否定すれば自分たちの苦悩のわけも説明がつかなくなるからだだろう。また、先に指摘したように、白人世界との仲介者としても神は必要であった。それで、創造主としての神の権威はゆるく認めながら、黒人の要求には無責任に応じる境界的な神様を保つことになったのではないだろうか。加えて、神がいなくなれば、最後の話で女を助けてくれた悪魔もいなくなってしまう。しかし、悪魔は手放せないキャラクターであった。不合理な神の采配の後始末をして、世界にバランスをつけたのは悪魔なのだから。

## 6. 不合理な被害を共有する者——悪魔の物語

黒人の口頭文学で、現代にも及んでもっとも興味深い登場人物は悪魔である。悪魔は、民話だけでなくブルーズやラップの歌詞にも出てくるし、黒人のヒーロー像は強さと悪さにおいて

悪魔に勝てる男を基本にしている。「悪さ」とはすなわち、主流社会の秩序に反抗することである。黒人たちの悪魔への親近感、天国を追われて永遠に不本意な生活を送らなければならないという点で、悪魔に同類意識を抱いているところに発している。それだから、黒人民話のヒーローは悪魔に助けられることができるし悪魔と価値観を共有でき、悪魔とよくコミュニケーションがとれるのだ。黒人民話の悪魔はまるで怖くない。

あるときジャックは悪魔と力比べをすることになった（“Strength Test Between Jack and the Devil”: 164-65）。悪魔がどんなに大きなものを投げてもジャックは負けない。そこで日を改めて勝負することになり、悪魔は「白人の教会より大きな」金槌をもってきた。彼はそれを遠くへ投げ飛ばし、「今日は火曜なんで、俺はいったん家に帰って木曜の午前九時に戻ってくるから。それまで金槌は地面に落ちないから」と言う。確かに金槌は木曜日まで飛び続けた。これに対抗するジャックは、ようやく地に落ちた金槌を大きな穴から拾い上げ、いまや投げようというとき空を見上げて、天使やイエスに向かって危ないからどいていろと声をかける。これを聞いて、悪魔はあわてて勝負を下りる。

「天使のラファエル、気をつけろよ！ ガブリエル、どけどけ！ イエス様、離れていた方がいいですぞ、これから投げるぞ」

ジャックは天国に声かけていたのだ。

すると悪魔はジャックに駆けよって、

「ちょ、ちょっと待ってくれ。俺の金槌をあっちに投げしてくれちゃ困る！ 追い出されたとき、道具をたくさんあそこに置いたままにしてきた。まだ取り返してないんだよ。だから、頼むからその金槌をあっちに投げないでくれ」（165）

神に天国から追放されて地獄に堕ちた悪魔は、天国に残してきた荷物を取りに行けないで不自由しているのである。この金槌まで天国に投げ入れられてしまったら困るといふのだ。両者の勝負はジャックの勝ち。だが、恵みの領域から締め出された悪魔に対する語り手の共感が伝わる話である。

悪魔に対する共感や同類意識は、理想の女性を悪魔の娘に設定しているところにもっともよくあらわれている。デルタ地方のブルーズマンを思わせる危うい男ジャックを主人公にした次の話には、まるで天使のようにやさしく魔法も使える悪魔の娘ベアトリスが出てくる（“How Jack Beat the Devil”: 51-8）。

ジャックは父親から500ドルの財産を分けてもらい独立することになった。それを元手に博打でうまいこと儲けているときに、手ごわい相手が現れ、あれよあれよという間に全てを失ってしまう。とうとう命を賭けて最後の勝負に出るが、これも負けると相手はジャックにこう名乗り出る。

「悪魔ったあ俺様のことだ。おいらは深くて青い海の向こうに住んでいるのさ」（52）

彼はなかなかロマンチックで二枚目風の悪魔で、ジャックをすぐには殺さず「お日さんが沈み、

また昇る前に俺のうちへ来れば命は助けてやる」と、一度だけのチャンスを与えてくれる。そう言って悪魔が消えてしまうと、ジャックはただ泣くばかりだ。そこへ老人が現れ、<sup>ボールドイーグル</sup>白頭鷲に乗って海を渡れると教えてくれる。ただ、白頭鷲が叫ぶたびに仔牛の肉をやらないとジャックが食べられてしまうという。そこでジャックは仔牛を連れ白頭鷲につかまって海を渡りはじめるが、最初の叫び声を聞いたとたん怖れおののき、鷲に少しずつ与えるはずだった仔牛を一度に丸ごとやってしまった。残りの旅程で困ったジャックは、次に鷲が叫んだときには自分の腕を、その次は脚を食べさせて急場をしのぎ、なんとか海の向こうにたどり着くことができた。

人に道を尋ねながら悪魔の家を探すと、彼は白い家（ホワイトハウス！）に住んでいた。

ジャックは悪魔の家に行き、ドアをたたいた。

「どなた？」

「あの、悪魔さんの友人なんですけど。腕と脚がない友人で」

悪魔はかみさんに

「ドアを開けて、そいつに腕一本と脚一本くれてやってくれ」

と言ったので、おかみさんは腕と足をジャックに渡して、彼はそれを身につけた。(54)

ジャックは約束通り悪魔の家に来たことが認められ、とりあえず命拾いをするものの、朝ごはんの前に100エーカーの広大な土地を開墾するように言いつけられる。そこへ悪魔の子どもたちがジャックを見物にぞろぞろ出てきて、その中にとてもかわいい娘がいるが、ジャックはそれどころではない。木を一本切り倒しただけでへとへとで、悪魔に命じられた仕事はとて成し遂げられないとわかり、めそめそ泣き始めた。すると先ほどのかわいい娘が朝食を運んできて、声をかけた。

「ジャック、どうしたの？」

「君のパパがオレにはできっこない仕事をいいつけて、できなきゃ殺すって言ってるんだ。

オレは死にたくないよう」

「朝ごはんを食べてね、ジャック。それからあたしの膝枕でおやすみなさい」(55)

悪魔の娘ベアトリス（本名、ベアトリス・デヴィル）は、ジャックが寝ている間に全部仕事を終わらせてくれた。同じようにしてあと二回の試練も解決してくれ、何も知らない父親の悪魔は「お前はなかなか賢い。俺様と同じくらい頭がいい」とジャックを褒めてくれたものだから、ベアトリスとジャックはめでたく結婚できることになった。

ところが新居を構えた後で、悪魔が再びジャックを狙って追いかけてくる。このあとのドタバタ劇も実に愉快で人を食った話なのだが割愛し、ベアトリスの知恵と勇気で切り抜けたとだけ要約しておくことにする。それでも最後、ジャックはとうとう悪魔に追い詰められてしまう。間一髪というときに空洞になった丸太があったので、ベアトリスに言われてジャックはそこに逃げ込むのだが・・・。

悪魔はあたりを見回し、ふと丸太に目がいった。なんかあれがくさいぞ、のぞいてみるかと思って、丸太を拾い上げた。

「ハ、ハ、みい一つけた！」

丸太の中のジャックは怖れおののいて、思わず主に助けを求めた。

「おお、主よ、憐れみを」

悪魔は、主の御名を耳にするのはとんでもなく嫌いだ。だから、とっさに丸太を投げ出して「ちっくしょー、<sup>ゴッド</sup>神様が丸太の中にいるって知ってたら拾ったりしなかったんだ」(58)

この悪魔はたしかに、博打に全財産をなくし命まで賭ける愚かなジャックの隙を狙う厄鬼ではあるが、一方では子沢山で温和な家庭をもち、「夜明けまでに来い」とジャックに命じ彼の怠惰な精神を立て直す試練にかけるなど、理想の父親にふさわしい堅実な側面もある二重人物だ。ベアトリスはジャックに一目惚れし、彼の試練を全部取り除いてやり命がけの逃避行を共にする(要約では割愛した部分)。この展開には、ヨーロッパ民話の重要な元型の一つであるエロスとプシュケの神話が、男女を逆にして使われている。その美しさゆえに神の領域に招かれエロスに恋をしたプシュケは、エロスの母であるヴィーナスの怒りに触れて三度の試練を経験しなければならなかった。彼女を助けたのは、しかし、エロスではなくて自然界の生き物たちであったが、ついに彼女はエロスと結ばれることができた。プシュケは自分の精神力で成功を導いている。

一方ジャックの話では、男のジャックが三度の試練を受けるが、もとはといえば自堕落が原因である。しかも困難に会うたび、彼はめそめそ泣くばかりだ。聴衆は、ジャックのダメ男ぶりをまず笑う。つぎは、ベアトリスに甘やかされて生きのびているジャックに対する羨望が聴き手を解放する。生産的なことは何もできず努力もしないのに、場当たりの行動しているだけで幸運が巡ってくるのだから、うらやましいことこの上ない。ジャックは、食事をもらってベアトリスの膝枕で寝るだけである。何もできない男に惚れる悪魔の娘ベアトリスは、まさに黒人女性のヒロインなのである(悪魔の歌を憑かれたようにうたったブルーズシンガー、ロバート・ジョンソンには、「俺のベアトリス」と彼が呼ぶ女性に、今にも捨てられそうな、不甲斐ない男の嘆きの歌がある)。

現実と関わり合って人生を建設していくことなど思いもよらないジャックは、自らの手足を失っても、とりあえず恐怖を避け、命を繋ぐ。彼の夢は、努力せずとも人生がよい方へ自動的に展開していくことである。悪魔はこの夢をかなえるきっかけを彼に与えるトリックスターで、悪魔の娘は夢を実現してくれる彼の分身である。そして、再び注目したいのは、ジャック自身は成功につながるような生産的な行動を何ひとつしないということだ。彼の絶望的かつ滑稽な無力さとベアトリスの超能力とのギャップが笑いを誘い、聴衆の夢に希望を与えるのである。

さて、黒人民話のヒーローに、ビッグ・シックスティーンという怪力の大男がいる。靴のサイズが16だからシックスティーンと呼ばれるらしく、それだと34センチくらいのを履いていたことになる。彼は主人の求めに応じて悪魔をやっつけた(“How Jack O’Lanterns Came to Be”: 172-73)。悪魔の家の扉をノックして、「ちょっとお話がしたいんで」と呼び出し、悪魔が頭を出したところをハンマーでたたいて殺したのだ。月日が過ぎビッグ・シックスティーンが死んだ

とき、彼は天国で「パワフルすぎる」といって門前払いを食らい、地獄へ行かなければならなくなつた。ところが地獄の入口に立つと、死んだ悪魔の子が「ママ、ママ、パパを殺した奴が来てる！」と騒いだものだから、悪魔の未亡人は恐れをなしてビッグ・シックスティーンを地獄へ入れようとしな。その代りに地獄の炎を少しばかり彼に渡し、次のように言った。

「ここへ入っておくれでないよ。この熱い炭を持ってって、勝手に自分の地獄を始めておくれ」(173)

この話では、悪魔の死がビッグ・シックスティーンに「別の地獄」、すなわち彼の新たな住処を建設させるきっかけとなっている。悪魔は、地獄と黒人との仲介者である。神が「天国」という白人の現実（と黒人が了解する場所）と黒人との仲介者でありながらその仲介能力が役立つであつたのに引きかえ、地獄と黒人を繋ぐ悪魔の仲介能力は具体性もあり効果的だ。ビッグ・シックスティーンは怪力ゆえにヒーローなのだが、怪力を理由に天国へ入れてもらえない。そのうえ地獄にも断られればいよいよ行き場のない彼に、地獄の火を分けてやって新たな地獄を開くことを勧めてくれるのは、悪魔の未亡人である。悪魔の娘ベアトリスがジャックに家庭を与えたように、ビッグ・シックスティーンも地獄の女に居場所を与えられているのである。どちらの場合も、主人公の男が落ち着くとき悪魔は死んでいる。そう考えると、悪魔はきっかけを作って黒人の男に新しい世界を開くトリックスター、地獄の女は彼を新しい世界へ導き入れる救い主ということができる。

## 7. 語りえない者たちの語り——変幻型の価値観へ

黒人の民話は、絶望的な状況の中で人生の生産性を回復し、希望を繋いで生き続ける工夫を示している。その工夫とは、語りの中で価値観を転覆させて笑うことと、ポジとネガが入れ替わった後の世界の肯定である。自分たちの生は地獄だと語ることは、現実の地獄を永続的に生きている人々にはできない。彼らはそのようには語らずに、地獄の価値を転覆させ地獄の側から地獄を語るのである。つまり、「いい地獄」という矛盾した場所を語るのだ。だから彼らは必然的に、地獄は最悪だという通常の価値観と、大丈夫な地獄があるという彼らの信念との二重性を負うことになる。黒人の民話にトリックスターヒーロー以外のヒーローがないわけは、トリックスターが異なる価値の世界を行き来するからであり、黒人民話の享受者らは価値観の転覆をして世界を変えてのみ、希望が持てるからなのである。そしてなによりも既成秩序の転覆は笑いを誘い、彼らが日々耐えている緊張を一時的に解放し、自信を回復させる。「身銭を切っても黒人は笑いたい」「黒人の世界は笑いに溶ける」とハーストンが言ったのは、鋭く真実を突いた指摘だったのである。

利害が対立する価値観を、両者間の鋭い亀裂にもかかわらず柔軟に往復し、笑いによって緊張を緩和するトリックスターの語りは、異文化間の摩擦が深刻化している21世紀の世界にあって、もっとも必要とされている知的技術なのではないか。私たちは、価値観の変換方法として黒人民話が提示した嘘や暴力を受け入れるわけにはいかないが、あるストーリーの中に力関係



もモラルも固定しない変幻型の価値観が存在しうることを学べるし、笑いによってもたらされるエネルギーの回復と対立者への許しの気持ちを意識することができる。

これまでの歴史の中で積極的に語ることを許されなかった人々の語りに、耳を傾けるのは容易なことではない。なぜなら、聴く者は自分の秩序に目隠しをし、周到に隠された別の秩序を探り当てなければならないから。それでも、アメリカの奴隷が民話を語り伝えそれが形を変えてハーストンの時代に楽しまれ、現代でもインパクトを保っているように、語りえないものを抱えた人々の語りかけは、差異にはばまれつつも人間の営みの中で同時代的に何度も生き返る力を持っているのである。

最後に、紙面の関係でこの論文で十分に展開できなかった点を記しておきたい。まず、ハーストンが『騾馬と人間』に工夫した劇場的な民話の提示方法については分析を控えた。民話の記録に独自の工夫を試みたハーストンの思想は、代表作『彼らの目は神を見ていた』*Their Eyes Were Watching God*にも反映している。『騾馬と人間』での作品構成の成否もさることながら、ざわざわとした人々の話し声や笑い声が全体に漂うような作品にしたハーストンの手法は、文字より先に声をことばの基本とする彼女の文学観を具体化しており、詳しい検討に値する。また、女性ヒーローの不在とその解釈についても、本論では述べなかった。ヨーロッパ民話にみられるような女性の主体的な活躍がないことは、黒人民話全般にわたって観察されることである。この点を追求していけば、黒人文化とジェンダーにかかわる重要な指摘ができるだろう。この論考で紹介した諸登場人物に関しても、別の側面を加えてさらに議論を深める可能性がある。たとえば、ジョン物語にはジョンが祝祭を取り仕切る部族王としてふるまう話があり、アフリカの伝統を示唆して興味深いし、『騾馬と人間』に記録されたものではないが悪魔に関連する起源説話で、黒人が悪魔の手で創造されたとする話もある。以上のような点については、いずれ稿を改めてぜひ論じてみたいと思っている。

## テキスト

Hurston, Zora Neale. *Mules and Men*. 1935. Bloomington: Indiana UP, 1978.

## 黒人民話のアンソロジー

Abrahams, Rober D. *African American Folktales: Stories from Black Traditions in the New World*. New York: Pantheon Books, 1985.

Coulander, Harold. *A Treasury of Afro-American Folklore*. New York: Crown, 1976.

Goss, Linda and Narian E. Barnes. *Talk that Talk: An Anthology of African-American Storytelling*. New York: Touchstone Book, Simon & Schuster, 1989.

Hughes, Langston. *The Book of Negro Folklore*. New York: Dodd, Mead, 1958.

Hurston, Zora Neale. *Every Tongue Got to Confess: Negro Folk-tales from the Gulf States*. Ed. Carla Kaplan. New York: Perennial, Harper-Collins, 2001.

## 主要参考文献

Abrahams, Roger D.. *Deep Down in The Jungle: Negro Narrative Folklore from the Streets of Philadelphia*. New York: Aldine de Gruyter, 1963.

DuBois, W.E.B. *The Souls of Black Folk*. 1903. Norton Critical Edition, 1999.

- Gilroy, Paul. *The Black Atlantic: Modernity and Double Consciousness*. Cambridge: Harvard UP, 1993.
- Gates, Henry Louis Gates, Jr. *The Signifying Monkey: A Theory of African-American Literary Criticism*. New York: Oxford UP, 1988.
- Hurston, Zora Neale. *Folklore, Memories, and Other Writings*. The Library of America, 1995.
- Levine, Lawrence W.. *Black Culture and Black Consciousness*. 1977. New York: Oxford UP, 2007.
- Roberts, John W. *From Trickster to Badman: The Black Folkhero in Slavery and Freedom*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1989.
- Spaulding, Henry D., ed and comp.. *Encyclopedia of Black Folklore and Humor*. Middle Village, NY: Jonathan David, 1972.
- Pelton, Robert D. *The Trickster in West Africa: A Study of Mythic Irony and Sacred Delight*. Berkeley: U of California P, 1980.
- オング, ウォルター・J『声の文化と文字の文化』桜井直文, 林正寛, 糟谷啓介訳, 藤原書店 1991年
- ベルクソン『笑い』林達夫訳, 岩波文庫 (1938) 2010年
- 野家啓一『物語の哲学』岩波現代文庫 2005年
- ラディン, ポール, カール・ケレーニイ, カール・グスタフ・ユング『トリックスター』皆河宗一, 高橋英夫, 河合隼雄訳, 晶文全書 1974年
- 山口昌男『道化の民俗学』岩波現代文庫 (1975) 2007年
- 『文化と両義性』岩波現代文庫 (1975) 2010年
- 『笑いと逸脱』ちくま文庫 (1984) 1990年

